

四月九日

二階の南面、カロライン・ジャスミンが花盛りだ。四メートル位の天井まで育ったのは数年前だったが、花をこんなに咲かせたのは初めて。レモン・イエローの花はいかにもカロラインの名にふさわしく、湿った気配をまき散らさぬが良い、と思いたい。こんなに育ってしまったからには、今更、反米でゆこうと切り倒せない。屋上菜園に生ゴミ埋めて、いささかの草取り。仏の座という雑草は名前とは裏腹に仏の座帝國軍と呼びたいくらいに繁殖力が旺盛で、根も太く強くはびこっている。知らぬ間に何がしかの花が咲き、すももの木の花は散ったようだ。世田谷村は屋上を仏の座軍団に占拠され、二階はカロライン空挺部隊に降下占有され、一階は廃材の山の廃虚状態である。

十五時大隈講堂新入生ガイダンス。年に一度の全教員のミニレクチャー。それぞれの教師の考えを知ることができる。十八時リーガロイヤルホテルで非常勤講師の先生方との会。二〇数名の方が集まった。建築学研究所発足の報告をする。二〇時頃散会。二十一時前世田谷村に戻る。何人かの参会者より「批評と理論」出版に関する感想等をいただいた。閉塞状態の建築界に小さな一石位にはなつて欲しいと思う。

今日は何故か知れぬが昭和五十一年出刊河出書房新社の文芸読本中原中也を読み直してみた。中也に限らず、日本の詩人一般にそれ程の関心を持つわけではないが、小林秀雄の「中原中也の思ひ出」という短文に強烈な印象を受けた記憶があったからだ。再

読して、アアと思った。小林秀雄のこの短文に中也のすべてが批評し尽くされている。

四月十日 日曜日

グデグデと、三島由紀夫等読んで過ごす。午後は村上春樹までグデグデを拡げる。村上のエッセイの類は三島のものと読み比べてみると明らかに質が落ちる。三島は読者に文学の本義らしきを持つて何かをつきつけられると幻想し、やがて、絶望して自死した。本の印税収入とは何かと考えて、それによって生きる自分を嫌悪した。ある意味では文学の力、自分の力を信じるころがあった。村上には読者をマーケットとして視る。村上春樹は極めて消費資本主義的作家なのだ。山本夏彦言うところのニセ毛唐、ニセアメリカ人風のところがまさにある。夕方室内の原稿、丹下健三追悼文書く。二十一時修了。旭ガラスの伊勢谷君より電話あり、久米設計の役員、同級生の小野君死去の知らせであった。小野君は組織事務所を率いる建築家としての品格を持つ人間であった。小野君は病死であつたらしいが、余りに早過ぎる死である。残念だ。十二日の通夜には出席したい。